



## 新しい日本の音楽

日本の音楽を語るとき、忘れることができないひとりの天才がいます。その人は、宮城道雄です。

明治二七（一八九四）年四月七日、宮城道雄は神戸で生まれました。生まれて二百日たったころ、目の病気にかかり、八歳を過ぎると目が全く見えなくなってしまうました。失明の宣告を受けた彼は、人のすすめもあって、琴を習うことにしました。琴は、昔から目の見えない男の人がなる主な仕事の一つでした。

道雄は、二代中島検校けんぎょうに入門しました。琴の先生の教え方は、大変厳しいものでした。「目の見えない人は、記憶力がよくなくてはならん。一度教えたことを忘れるようではだめだ。わしは一度しか教えてやらんから、習ったことを決して忘れんように。」と、道雄に厳しく注意しました。彼は、毎回、自分のすべての能力を集中させました。そして、先生の教えのとおり、教わったことを一度で自分のものにしていきました。彼は非常に熱心で、人より多く学び、ひと月に三十曲も覚えたことがありました。

苦労のかがあって、道雄の腕前はめきめき上達しました。そして十一歳の時、彼は三代中島検校より免許皆伝を授かりました。免許皆伝とは、演奏技術などの奥義おうぎ（最も奥深い大切なことから）を師匠が弟子に全てを伝え、人に教えることが許されることです。ここにひとりの箏曲家そうきょくか（弦楽器の箏そうを演奏したり、作曲したりする人）が誕生したのです。

道雄は、学校で琴をひいて聴かせたり、大人に琴を教えたりしました。さらに、夜は尺八を練習し、小学校ではオルガンを弾かせてもらい、たちまちのうちに上達しました。

道雄が十三歳のころ、朝鮮で働いていた父親がけがをして働けなくなってしまいました。そのため彼は朝鮮の仁川じんせん（現韓国のインチョン）へ渡り、琴の先生をして、家族の生活を支えることになりました。彼は、昼は箏こ、夜は尺八を教えて一家を支えたのでした。

そのころ道雄は、すでに習い終わった何百という曲は弾きつくしてしまい、何かあきたらないものを感じていました。それまでの日本の音楽は、たくさんの型で成り立っていま

した。そのたくさんの中のどれかを選んで、曲を作っていくのが、日本の作曲の方法でした。彼は、日本の古い曲を深く学び尊敬していましたが、その良さだけでなく、足りない点も分かりました。彼は、いつしか作曲をしてみたいと考えるようになりました。

ある日のこと、「よし、自分で新しい曲を作ろう」と決心しました。道雄は考えました。来る日も来る日も考えました。「西洋の音楽は、覚えやすく、歌いやすい。日本にも覚えやすいメロディーがあってもよいのではないか。」彼は、西洋音楽の要素を日本の音楽に導入し、邦楽の活性化を考えました。彼は、夢中になって、ひいては直し、ひいては直して作曲を進めていきました。ついに、十四歳のとき（一九〇九年）、初めての曲「水の変態」という曲を作りました。この曲は新しく、のびやかな美しさをもち、聴いた人々を驚かしました。

めきめきと才能を発揮した道雄は、二二歳（一九一六年）という若さで、最高の位である大検校となりました。しかし、彼はこのことで満足せず、翌年（大正六年四月）、青雲の志（徳を磨いて立派な人物になろうとする心）を抱いて上京（東京へ移住）しました。道雄は二五歳で、作曲家として本格的にデビューしました。

道雄は、自分の新しい音楽世界を開拓し続け、「春の海」「さくら変奏曲」「秋の調べ」など、たくさん曲を作っていました。彼の作った曲について、ある人が「とてもすばらしい曲ですね。」とほめると、道雄は反省しながら、「いいえ。ここはこうなのです。」と自ら欠点を指摘し、さらにより曲を目指していきました。

彼の作品は、覚えやすく、歌いやすいので、今もなおたくさん作品が、多くの人々に愛されています。

へわたしたちは、宮城道雄から何を学ぶか？

- ◎ 一つ、努力・向上心
- ◎ 二つ、不撓不屈・強い心
- ◎ 三つ、創意工夫（新しいものを創り出す意識）

◎ 愛日小学校の実践 音楽専科 田中館 玲教諭

(一) 五年生の三学期

「日本の音楽に親しもう」(和楽器体験)

○ 音楽室に琴が三台あり、児童は琴の音出し体験をしました。琴爪を付けて音を出すことが、思った以上に難しいことが分かりました。絃が硬く簡単には音が出せないので驚き、苦勞するそうです。

(二) 六年生の一学期(六月)

「宮城道雄記念館」(徒歩五分)へ行って体験学習を行いました。

- ① 宮城道雄の少年時代をスライドで詳しく学習しました。
- ② 箏の説明を聞き、生演奏を聴きました。  
曲目は、「ロンドンの夜の雨」「汽車ごっこ」でした。
- ③ 箏の先生から「さくらさくら」を個別に指導していただきました。
- ④ 展示室を見学しました。

館の裏手には、「検校の間」さらに「宮城喜代子記念室」「日本庭園」などもあります。

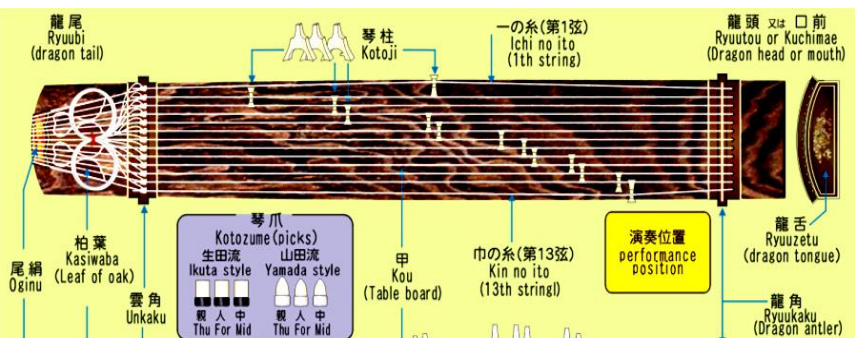
\*\*\*\*\*

◎ 国は文化財保護法により、「歴史上、学術上価値の高いもの」を文化財としています。「無形文化財」は、演劇・音楽・工芸などの技術です。芸能の部(能・浄瑠璃・歌舞伎・音楽など)と工芸技術の部があります。無形文化財で国の指定を受けると「重要無形文化財」と呼ばれます。保持者と認定された人が「人間国宝」です。

叔父の宮城道雄の弟子・家族であった宮城喜代子は、道雄の楽曲を最もよく理解し、演奏を体現し人間国宝に認定されました。道雄の死後も宮城箏曲の普及につとめ、後継者の育成に尽力しました。

◎ 地域文化財の活用について

新宿区内には平成二四年五月二日現在、区指定文化財は百四件、区登録文化財は三九件、地域文化財は一五件を数えます。各学校においては、地域文化財を教育課程に位置づけて、大いに活用してください。



## 《参考資料》

◎ 宮城道雄は新しい音楽世界を開拓するために、日本の古典楽器を改良し、新しい楽器の開発も、次々と行っていきました。その結果、**十七絃**(一九二二年)、**短琴**たにしち、**大胡弓**だいききゅう(一九二四年)、**八十絃**(一九二九年)を考案しました。

◎ 八十絃(はちじゅうげん)とは、宮城道雄が発明した八十本の絃を持つ大型の箏ことです。一九二九年に開発されました。「十三本の絃」を持つ普通の箏、道雄が発明した低音を拡張した「十七絃」に比べ、はるかに幅広い音量と音高を表出することができます。大きさと形状はまるでピアノのようです(ピアノの弦は八八本です)。八十絃では、箏の伝統的奏法(揺り、突きなど)による音色の変化や、柱の移動による調弦の変更も可能です。幅広い音楽を演奏するために製作されました。

◎ 道雄は、門人の指導だけではなく、昭和五(一九三〇)年から、東京音楽学校(現東京芸大音楽学部)で教授をしました。

◎ 五線譜・絃名譜を積極的に活用し、初心者用の箏や三味線のための教則本を執筆、出版しました。ラジオによる箏曲講習など、新しい邦楽教育を実践しました。随筆家としても人々を魅了しました。

◎ 昭和三一(一九五六)年六月二五日未明、演奏のため大阪へ向かう途中、東海道線刈谷駅付近で急行「銀河」から転落し、同日午前七時一五分、刈谷の豊田病院で死去しました。六二歳でした。

◎ 道雄の死後、夫人の貞子、姪の喜代子、数江姉妹が受け継ぎました。

## ◎ 道雄のエピソード

大正二二年春、道雄はこれまでの拂方町の家を引きはらって、そこからさほど遠くない市谷加賀町へ引っ越しました。大きな家で、しっかりとした木の門と小さな庭、それに風呂もありました。加賀町は閑静な住宅街でしたが、両隣の家がかなり近く、道雄はお稽古の音がさぞかしうるさいだろうとしきりに気にしていました。文学者の内田百閒ひゃくけんとの会話です。

百閒「庭の向うのお隣りの板壁に、蓆むしろを一ぱいに打ちつけて、ぶら下げておくとうるしい。」

道雄「そうすると、どうなりますか。」

百閒「そうすると、お稽古の音が蓆むしろにぶつかります。」

道雄「それで。」

百閒「それで夕方お稽古のすんだ後で、蓆を外してはたきますと、

一日中たまっていた音がみんな落ちますから、それを掃き寄せて捨てればよろしい。」

道雄「本当かと思いました。」



「むしろ」はワラを縦横に編みこんだものです。門松や植木の根巻き、農産物の保管や敷物として使用されています。



◎ 宮城道雄記念館 (新宿区中町三五番地)



点字タイプライターと楽譜



宮城曲の視聴室



記念館内にある道雄の胸像



記念館正面



道雄の遺品



愛箏の「越天楽」



検校の間

(道雄が作曲・著作に使った離れ)



佐藤春夫による道雄の略伝を刻んだ石碑



道雄作の八十絃箏



離れの中の様子

- 宮城道雄の偉業を記念して建てられた記念館です。
- 道雄が晩年まで住んでいた所に建設されました。
- 道雄の作品やビデオを楽しめる視聴覚室や、道雄が考案した楽器の展示等を行っています。